

ソクラテスと新渡戸稲造

—新渡戸がこよなく敬愛したソクラテスを識る—

話者 三上 章 (元 東洋英和女学院大学教授. 元 北星学園大学チャプレン. 現在 聖書・古典講読会主宰. 専門：西洋古典学・ギリシャ哲学, キリスト教学)

- 1 私はソクラテスに出会った
- 2 新渡戸はソクラテスに出会った
- 3 私と新渡戸がこよなく敬愛するソクラテスを識る
- 4 結びに代えて：ユマニストの系譜

ソクラテス 前470頃～前399 (70歳没)

新渡戸稲造 1862年9月1日～1933年10月15日 (71歳没)

1 私はソクラテスに出会った

ソクラテス：ピロソポス(φιλόσοφος, 愛智者)

Gk. 原典講読：*Apologia, Crito, Laces, Phaedo, Menon, Respublica*



La Mort de Socrate (1787) Jacques Louis David

2 新渡戸はソクラテスに出会った

◎ 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』「ソクラテス」(岩波文庫, 2007年) 137-144頁.

一 ソクラテスに依りて懷疑を解く

私は十五、六歳の学生時代から、世の中のことに就て思い悩んでいた。たとえば、自分では正しいと思っしてすることも、相手の気に障って、予想外の怒りや恨みを受けることもあるために、これからは、一体如何なる心掛けで人生を送ったら好いものかということに考え及ぶと、疑惑が百出して、何時も何時もその解決に苦しんだ。然るに、その後、ふとソクラテスの伝記を読むに至って、私の満腔の崇拜心と愛好心は悉くこの偉人の上に濺(そそ)がれるようになり、同時に、永年の懷疑も、頓(とみ)に氷解するを得たのである。

2.1 即ち友人間の交際にしても、あるいは一歩進んで、人生に処する上にも、手を下し、口を開く前には、一、二歩退りぞいて、我儘の利己のためではないか、という事を慎重に反省してみる。しかして、いささかでもそういう気味を帯びておるとすれば、断然これを中止するのであるが、一旦、自分が是ぜなり善なりと信ずるに於ては、それを実行するに寸刻の猶予もしない——こういうことを思って、頓(やが)てはこれを主義ともするようになった。

私が理想的実行家としてリンコーンを愛好すると同じ程度に於て、ここに理想的思想家の真意義をソクラテスの人格に見出して、すべての他の偉人にも増して、これが尊崇の念を禁じ得ないのである。

2.2 二 真に言行一致の人

ソクラテスの伝記書類は随分数多く読んだけれども、私の伝記研究は、学者のする学問のためではなく、常に応用的、いわば自分一個の**精神修養**を目的としたものであるから、勿論、システムなどは立っておらぬ。従って、ソクラテスを読んでも、着眼するところはその一点で、ソクラテスの哲学や何かに就ては、始めからあまり調べる気もしない。

ソクラテスを読んで、一番に面白く思うところは、**かのダイモン**
というものを常に信じて、絶えず、自分の心の中うちに、善悪邪正を区別する、**我にあらざる一種の力**を蔵している。訳してこれを**鬼神**とも称すべきか。とにかく、この一種の力が、たとえ自分の欲することでも、これを行為に顕わさんとする場合には、予めこの**鬼神**に伺いを立てて、允許(いんきょ)を受けることにしていた。

2.3 そして、もしその允許が出ない時には、結局実行を見合わすということになっていた。——これが私の注意を深く惹付つけた点で、また私もかくあろうとして、平生から夙(つと)に戒心しているところである。

私も随分無遠慮な口を利く方で、それが故には、如何なる時に、如何なる誤解を発生せしめ、如何なる迷惑を受けなければならないかも知れぬ。しかしながら、腹に確乎たる覚悟と信念とさえあるならば、さほどびくつくにも及ばない。ただし、考えてみれば、私などの主張するところは、存外穏やかなものである。一つの主義に固持して終世世に容いれられなかった人もあり、あるいはソクラテスの如く刑罰に処せられたり、あるいは、大塩平八郎の如く、世に反抗して反叛(はんぎゃく)を起したりするのに比べては、私は気の弱い所以(ゆえん)でもあろうか、甚だしく穏やかである。

2.4 思った事を実行するといっても、故意に社会の原則を無視したり、折角生立(おいた)って来た習慣を、無闇と破壊するというほどの意気込はない。また一面には、自分の所信にしてもし俗情に全然かなわない時に於ては、私は出来るだけ譲って、主張を枉(ま)げることとする。そして、最後に、これ以上は譲られないというところまでは、自分の力を保留しておく考えである。

それはとにかく、ソクラテスの偉大なところは、徹頭徹尾、思い切って所信を披瀝した、その無遠慮な点に存する事を否み難がたい。もしソクラテスにして、何彼(なにか)にかと斟酌ばかりして、思う事も遠慮していわなかったとするならば、世界はまあどれほどの大損失であったことだろう。プラトンの花も咲き損い、アリストートルの実もまた結び損そこなったに違いない。ソクラテス位の大人物になると、言と行との区別が全くなくなる。

2.5 昔からいう**言行一致をする言葉**が丁度それである。世には、能く「口の人だ」「口ばかりの人だ」といって、言行不一致の輩を嘲けることがあるが、しかし、その「口ばかりの人」にして、もし言うところのものが、すべて赤誠と確信から迸(ほと)ばしり出いずるものであって、**その一語が、直ちにその人の名誉地位に連関し、一命を賭(と)して吐露する、というほどの概があるならば、その言は慥(たし)かに「行」である。否、寧ろ「行」よりも意味が強いと思う。**何故ならば、行は具体的にして、しかも場所と時とを制限するが、言に至っては、抽象的でその達し及ぶ所広く、時もまた無限であるではないか。ソクラテスがアテンの市長になって、其所(そこ)の衛生工事を改良したとか、事務を整理したとか、あるいは軍人になって、ペルシャ人に勝ったことがあったとしても、それは恐らく、彼が口その物で称えたことより以上の仕事とはならなかったことであろう。

2.6 三 崇拜する理由数箇条

私がソクラテスを好み、かつ崇敬する理由を数箇条にして述べてみるならば、**先ず第一には、何事をなすにも、始め己を省み、本心に伺いをたててからする**ということで、これは、今日世間で頻(しき)りに唱道しつつある、**修養なるものの根本となるもの**である。

第二は、無闇に人を区別せず、また責めない点である。たとえば、議論をするにしてもその相手を選ばず、またその題目をも別に選ばない。そして、目的は、相手を負かそうとか、自分の主張をあくまでも徹そうとか、そういう浅薄な野心は毫末(ごうまつ)もない。ただ自分を忘れて、道のために議するという風の態度がありあり見える。だから、およそ志のあるものは誰でも相手にして、少しも意としないのである。

2.7 第三には、高慢な人でなかったということを数えたい。当時、ソクラテスは具眼者から先生といわれるほどの尊敬を受けていながら、微塵も高ぶる風がなかった。また当時、アテンの政治は民主主義であったが、しかし、その制度の下にも、不思議なことは、高慢な人が沢山いた。そして、ソクラテスばかりはその例に洩れていた。してみると、ソクラテスの人物の高慢臭くなかったのは、時代の然らしめたところというようなことが言えなくなる。私は、この徳をソクラテスの性得(しょうとく)に帰するよりも、寧ろ**修養の結果**と看做すことの妥当なるを信ずるものである。

第四には、年が行っても、油断せずに、修養を持続した点である。とかく、吾人(われわれ)は、いくらか名前を知られ、人の尊敬を羸(か)ち得るようになると、忽(たちまち)もう偉くなったような気がして、心が弛み、折角青年時代に守り本尊として

2.8 いた理想を、敝履 (へいり)の如く棄て去るのが多いものであるが、独りソクラテスに限っては、こういう不始末が毫末もなかった。孟子のいわゆる大人にして赤子の心を失わない態度が、実に歴然としてその生活中に見えるのである。

第五には、輿論というか、俗論というか、いわゆる世評なるものに頓着しなかったことである。ソクラテスの容貌は、性来とはいいながら、頗る滑稽なもので、常に物笑いの種となっていた。特に、衆人稠座 (ちょうざ)の中に出ると、直ちに面の批評をされる。けれども、ソクラテスは、その冷評や罵詈の声を聞いても、少しも怒らない。のみならず、自分もまた一緒になって、声を立てて笑っていた。また、ソクラテスはこういう風の外觀的のことばかりではなく、時代の文学者仲間などには、その主義なり思想なりが、往々にして非難の的となり、甚しきは、この人

2.9 を芝居の芸題などにして公々然と冷嘲を浴せかけたこともある。 ※ アリストパネス『雲 (Nubēs)』

けれども、ソクラテスは終始自若としていて、こせこせした弁護をせず、やはり自分も一緒にその芝居見物をして、衆人と共に笑い興じていたほどである。かかる美点を一々列挙するならば、それこそ僕を換(かえ)うるものなお足らぬであろう。勿論、ソクラテスだとて、全智全能の神ではないから、欠点を探れば相応に求め得たであろう。けれども、私はこのソクラテスが全然好きなのだから、その美点ばかりを挙げて差支(さしつか)えないことと思う。グロードなどという人は、ソクラテスの短所を覓(もと)めて、悪辣な筆を運ばし、一時読書界の注目を惹いたこともあったが、しかし、これも今日では、殆んど観察点が外れていて、いずれも正しい筆でないことが明かになった次第である。

2.10 四 公明正大の死

私は、ソクラテスの最も偉大なる点を以て、彼の悲劇なる死際公明正大なのに持って行きたいと思う。ソクラテスの死は、真に死を見ること帰するが如しであった。彼が罪なくて牢獄の人となった時には勿論人を恨らまなかった、弟子などが集まって来て、頻りに弁護せよ弁護せよと勧告するけれど断乎として肯(う)けがわなない。弟子どもは声を励まして、「先生が何の罪もなくして死なれるのが残念です」というと、ソクラテスは嫣然(えんぜん)笑って、「さらば罪あって死ぬのは残念でないのか。死ぬる死なぬは畢竟第二義のことだ。心の鍛錬が第一義だ。」といて聞かした。そして誰も恨まず、天も地も怨みず、泰然自若として振りかかる運命を迎えたのである。

私は、平生自分に関した不愉快な世評を聞いたり、悪口など

2.11 を耳にすると、この場合、ソクラテスであつたら、どう
いう風に始末したろう、と考える気になる。また、思う事
がならず、失望落胆に沈んでいる時にも、もしこれがソクラテ
ス翁さんであつたら、この一刹那を如何に処するであらう、と
振返って、静かに焦立(いらだ)つ精神を鎮めてみると、ある雄々
しい本然の心が腹の底から声を出すのである。同時に、不愉快
な気分も、衰えた神経も、忽(たちまち)にして去ってしまう。

勿論、私はソクラテスの真似をするという訳ではないが、書
斎には常にこのソクラテスと、リンコルンのバストを飾ってお
く。これなども、立派に修養の功を積んだ人々には、かかる必
要は全くないであらうが、私の如き未練なものには、これが一
番に強い刺戟になるのである。

(1911年1月1日『中学世界』14巻1号)

2.12 ◎ 『論集』 「ソクラテス」 「死」の問題に対して (岩波文庫, 2007年) 145-149頁.

死というような哲学じみた問題は、僕らの口を出すべきものでもないし、また出したところで何らの権威にもなるまい。が、ただ死というものは人間として誰でも免るべからざる事柄であり、かつまた考えまいと思っても必ず我々の心を襲うて来る事柄であるから、哲学者でなくても、何人でも、死については何かの思想は持っているものである。しかし一般にいえば死なる現象をいくらか弄てあそぶという嫌いもなきにしもあらずと思う。殆んど 巫山戯(ふざけ)半分に死を論ずるというものもある。しかしこの死に対する観念態度の奈何(いかん)は即ち凡俗と聖賢とを区別する標準じゃないかと思う。死を怖れるという語弊があるが、また死を軽んずるといえばよく聞えるけれども、

2.13 軽んじ方によっては甚だ愚の極であって、日本人は死することを何とも思わぬというは、褒れば褒るようなものの、生の責任を知らぬものと批難さるるのも無理ならぬことと思う。

死の価値を定むるものは生であると思う。しかして生の価値を定むるものは義務である。死を軽んずるということは義務を軽んずるという事になると僕は思っている。己れの為(な)すべき事を為して天にも地にも愧(は)じない人は、死を見ること帰るが如くなるべきで、これは古来の聖人君子の死方を観てもよく分る。これに反して己れの為すべき事をも為さずして死を恐れぬという。その辺の熊だの八だのと択ぶところがない。こういう風に死を軽んずるという事は決して褒むるに足らぬと思う。

誰でも死を怖れるということは普通であるが、この死を怖れるという観念は、ただ生理学上あるいは生物学上のみの現象で

2.14 あろうとは僕には思われぬ。これには深い倫理的の意味のあるものと思う。死を怖るるとは即ち生を重んずるの意味だろうと思う。生を重んずるというのは生きて為すべき義務を重んずる意味である。譬えていえば少女が男子に近づくことを怖れる、その理由を訊(ただ)せば知らない。この無意識に怖いということは少女の節操を重んずる理由であるんで、人が死を怖れるのもこれと同じもので、無意識に生の義務を重んずるに由るものと思う。

己れの義務を全うした人には、死は怖くも恐ろしくもないものじゃないかと思う。かつまた死というものが、果してそう明かに生から区別すべきものかどうかという事も僕にはちょっと信じられない。無論死ねば肉体が朽ちる。物を言うておったものが言わなくなる。動いたものが静かになる、というような点からいうと非常な変化である。けれどもこれは生の一段階に

2.15 過ぎないのじゃないかという気がする。聖書にもある通り麦の種が死ななければ穂が出ない、ちょうどあんなようなもので、朽ちるところはなるほど麦の種が素人言葉でいう朽ちるように朽ちるであろう。が、それがために新たに種を結ぶところの根だの茎だのが生える。幽明とか、有無とかいうものは形而下の話で、精神上からいうたならば、生と死というものはさほど区別のあるものでないかも知れんと思う。 **メーテルリンク**の『**青い鳥**』——あれは読んでも面白い戯曲であるが、私はあの実演を亜米利加で見たが、実に今でも忘れられない印象を受けた。 **爺さんと婆さんが小屋の前に腰を掛けて眠っている。そこに孫が二人走って来て「お爺さん、お婆さん」と声をかけると、二人が眼を覚まして孫を抱いて大変に喜ぶ。すると孫は、「お爺さん、お婆さん、あなたたちはよほど前に死んで**

2.16 しまったんじゃないんですか」というと、お爺さんがいうのに、「世の中では私たちを死んだというんだが、いわゆる死んだ人も世の中の人を忘れている間は死んだというんで、記念してくれる人があるとその度ごとに生き返るんだ。」という所がある。それから同じ『青い鳥』の中に――あすこは芝居で見ぬと分らぬ所と思うが――子供ら二人が墓場に行き、妹は「こんな淋しい所に来て怖い怖い」と大きな声して泣く。すると兄貴の方が「何怖い事があるものか」というてちょっと頭に被っている帽子に手を触ると、墓場が急に花園に変わる。詰り世の中に死というものがないということを現わした所で、即ち頭の使いようによって死ぬる生きるという事が定まるんで、多く主観的の現象と見做してよいように思う。

私はこの死という事を思うと、何時(いつ)でもソクラテスと

2.17 基督(キリスト)の死方に心を慰むることが多い。かのルソーもソクラテスの伝を書いて、彼の自若として死ぬる様には非常に敬服したものと見えて、その伝の筆を擱(お)かんとする時に「ソクラテスは実(げ)に哲学者の死を遂げた」と書いてその文を結ばんとした時に、ふと眼前に閃(ひらめ)いたのは基督の死方であった。故にまた筆を執り直し殆んど附録のように「然るにエス・キリストは神の如くに死した」と書き加えた。外から見て、自若として死を迎える胆力は、世に稀とはいいいながら、数えれば少くないと私は思う。ただややもすると、死を以て最上の戯曲ドラマの如く思っているものがある。俺が死ぬんだから、ここで一つ華やかにして見せようというようなものがある。内心、人と和し神と親しみ、心に一点の悔ゆることなく、安らげく死を迎う、これは頗(すこぶ)る少いものだと思う。プルタークの英雄伝などを見ると、ローマ人などには、

2.18 よく日本の英雄豪傑に似た人格が沢山ある。その死に臨んだ時なども、いわゆる武士気質を現わしているが、しかしその中に死を一のドラマ的に感じておりはせぬかと思わるるものが沢山ある。これは私の感心しないところである。ただ、何にもない、当り前の通りにして死ぬる様は、これこそ実に敬服に値するのである。僕は日頃南洲翁を崇拝するものであるが、この点に於ても益々翁の偉大なることが分る。如何にも生きておっても死んでおっても何も変らんという風が見える。あるいは死を見ること生の如く、その代り一方には生を見ること死の如く、形而上幽明有無の区別を知らなかった。実に平々淡々としている。こういう修養が出来た人が、一番エライんじゃないかと私は思う。（1913年11月1日『中央公論』28巻13号）

※ 南洲翁：西郷隆盛 1828-1877

2.19 ◎ 新渡戸稲造『自警録—心のもちかた—』(講談社学術文庫)「第10章 人生の成敗」〔ギリシアのソクラテスを見よ〕140-142頁.

むかしギリシアの哲学者ソクラテスのもとに、ある兇漢が来て、さんざん悪口を言って帰った。かたわらに聞いておった門弟が、哲学者に向かって、「先生あいつ奴(め)、いかにも憎い奴でございます」といったときに、哲学者は泰然として、「なぜにくい」といったら、「あんなに先生を恥ずかしめたのがにくい」といった。彼は笑いながら、「お前は少し考え違いをしている。彼はわが輩を恥ずかしめた考えかも知れないが、俺はちっとも恥ずかしめられたとは思わない。自分が恥でも受けたような顔をしとったかね」と答えたという。失敗もその通り、世の中で何某(なにがし)が大い失敗したと四面楚歌の声が聞こえても、本の当人はどこを風が吹くかという顔をしていることが

2.20 たまさかある。二千四百年前に、ソクラテスがアテネの裁判所に召喚せられ、有罪の宣告を受けて、獄屋に投ぜられたときには、アテネの者が皆々嘲けり笑って、とうとうあのおしゃべり爺いも、あの年になって、本性露見して畳の上でくたばりそこなったわい、と評判を立てて、もし当時アテネに新聞があったものなら、いかに当時の記者が論説やら雑報に忙しく彼の罪状を書き立て、彼がその日まで口に唱えた教訓はまったく偽善であったとか、彼の純潔なる素行はたくみに人を欺くの方法であって、その実、彼がかくのごとき事したのであろう、ああいう事をしたと、ありとあらゆる捏造説を書き立てたであらう。

基督がゴルゴタの山上で、かの非命の最期を遂(と)げたごときも、世人は、あの男もとうとう尻尾を現して、あのさまの

2.21 死に方をしたとか、表向きには君子顔をしておっても、陰ではだいぶ不仕末の事があったそう、社会主義も唱えたそう、某婦人と仲がよかったそう、謀叛の目論見さえしたそう、始終下等な女や悪党の仲間につき合っておったそう、折々は魔法みたいな事をして愚民を驚かしたそう、始終猫撫声(ねこなでごえ)をして女子供を手なずけたそうなど、その他あらゆる悪口をもって、彼は見事に失敗したなどといったであろう。いずくんぞ知らん敗けたと思った人が最後の勝利者たることを。

負けて退(ひ)く人を弱しと思ふなよ智恵の力の強き故なり

3 私と新渡戸がこよなく敬愛するソクラテスを識る

3.1 参考文献

◎ プラトン著作集

納富 信留 訳『ソクラテスの弁明』(光文社古典新訳文庫, 2012年)

三嶋 輝夫・田中 享英 訳『ソクラテスの弁明・クリトン』
(講談社学術文庫, 2001年)

岩田 靖夫 訳『パイドン』(岩波文庫, 2000年)

◎ クセノフォン『ソークラテースの思い出』 佐々木 理 訳
(岩波文庫, 1977年)

◎ アリストパネース『雲』 橋本 隆夫 訳.

『ギリシャ悲劇全集 1 アリストパネース』(岩波書店, 2008年)

3.2

新渡戸が使用した プラトン著作集の英訳

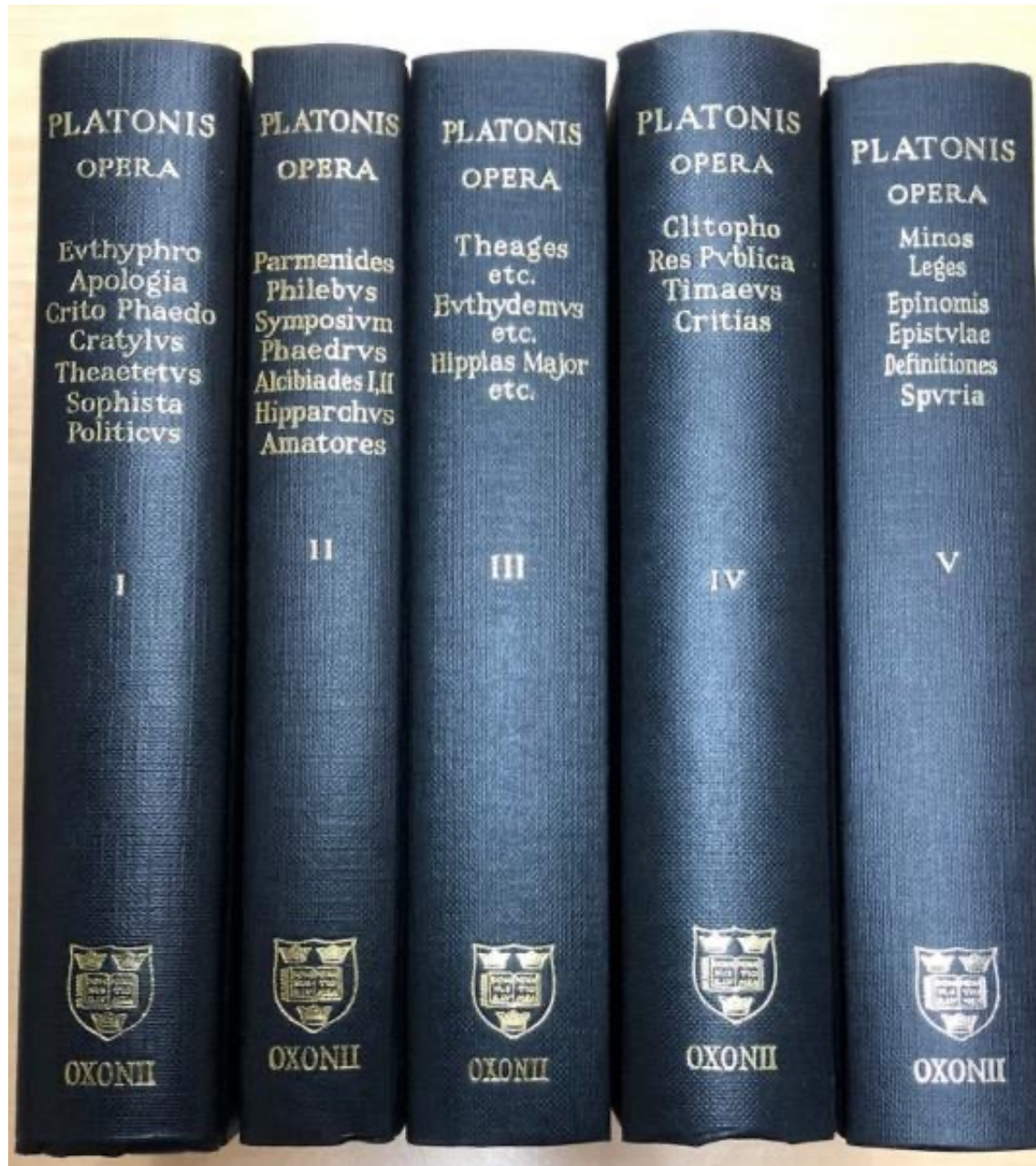


Benjamin Jowett, 1893

The Dialogues of Plato translated into English with Analyses and Introductions by B. Jowett, M.A. in Five Volumes. 3rd edition revised and corrected (Oxford University Press, 1892).

3.3

Oxford Classical Texts: Plato



3.4 プラトン Platōn 前427-前347

〔加藤信朗 2015年〕日本大百科全書(ニッポニカ)

プラトンは渾名。本名は「アリストクレス」 アテネの名門の生まれで、若いころは政治に志したが、ソクラテスの処刑を転機として、暗愚なアテネの政界を見限り、人間の存在を真に根拠づけうるものを求めて、愛知(フィロソフィア、哲学)に向かった。

紀元前385年ごろ、アテネの近郊、英雄アカデモスに捧げられた神域に学園アカデメイアを開き、各地から青年を集めて、研究と教育の生活に専念し、80歳に及んだ。その間二度までもシチリア島に渡り、シラクサの僭主ディオニシオス2世を教育し、理想の政治を実現しようとして挫折したが、その試みは彼の哲学の向かうところを示している。

生前に公刊されたほぼ30編に及ぶ著作は、そのまま今日に保存されているが、ほぼすべて一種の戯曲作品であって、いろいろ論題をめぐり哲学的論議が交わされ、「対話篇」とよばれている。ソクラテスが主要な登場人物である。執筆年代によって、

〔1〕ソクラテスを中心にして、主として徳の何であるかが論ぜられ、たいていアポリア *aporiā* (行き詰まり) に陥って終わる前期対話篇 (『ソクラテスの弁明』『クリトン』『ラケス』『カルミデス』『プロタゴラス』『ゴルギアス』『メノン』など) ,

〔2〕魂の不滅に関する壮麗なミュートス *mýthos* (物語) に飾られ、ソクラテスによってイデア論が語られる、文芸作品としてはもっとも円熟した中期対話篇 (『パイドン』『パイドロス』『饗宴』『国家』など),

〔3〕 哲学の論理的な方法への関心が強く、魂とアイデアの説がソクラテスの姿とともにしだいに姿を消していくかにみえる後期対話篇（『パルメニデス』『テアイテトス』『ソピステス』『ポリティコス（政治家）』『ピレボス』『ティマイオス』『法律』など）に分かれる。

3.5 新渡戸とプラトン

◎ 『全集』20「編集余録」〔258 偉大なるプラトン〕289頁.

「古き薪は燃やすべく，古き酒は飲むべく，古き書は読むべきである．・・・プラトンは，最近の著者と同じくらい新鮮である」

◎ 『全集』20「編集余録」〔420 プラトン近代教育を語る〕

453頁. 「プラトンは永遠に若い．プラトンの唇から流れる言葉は，泉からほとばしる水にも似て，いつになっても新鮮である．プラトンは言う——『けだしわれわれが今話しているのは，こういう狭い意味の教育ではなく，青年時代から始まる徳の教育のことであって，これは，市民としての理想的完成を熱烈に追求させるのであり，また，正しい統治法と服従法を教えるものである』」

3.6 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典「ソクラテス」

◎ ソクラテス Sōkratēs 前470頃-前399

彫刻家ソプロニスコスと助産師パイナレテの子。前半生はほとんど不明。後半生、特に晩年はプラトン、クセノポン、アリストテレス、アリストパネスの著作から知られる。著作を残さなかったもので、その学説は主としてプラトンの対話篇によるほかはなく、それ自体哲学史上の大きな問題となっている。

ソクラテスは「汝自身を知れ」というデルポイの神託をあらゆる哲学的思考の出発点においた。人間の自己とは身体ではなく靈魂であり、この靈魂をよい状態に保つことに人間としての幸福が存するとの立場から、善や他の諸価値をロゴスによって吟味することを試みた。

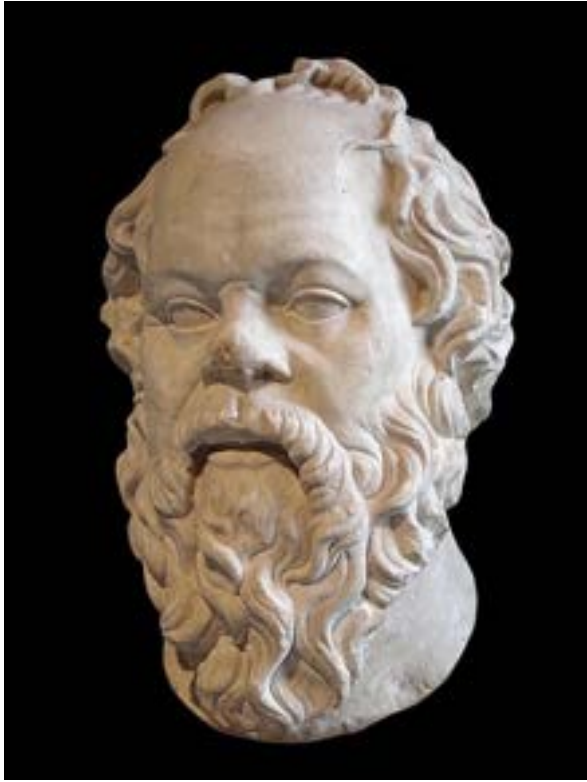
その方法としては対話におけるエイロネイア（ソクラテ斯的皮肉）と助産術（マイエウティケー）が有名である。アリストテレスは学の基礎としての帰納法と概念的定義をソクラテスの二つの功績として認めている。

70歳のときメレトスやアニュトスらに告訴され死刑宣告を受け、毒杯を仰いで死んだ。

◎ デジタル大辞泉「ソクラテス」の解説

「よく生きること」（エウゼーン）を求め、問答法によって相手に自らの無知を自覚させ、真の認識に到達させようとした。しかしこの努力は理解を得られず、国家の信奉する神々を否定し、青年たちに悪い影響を及ぼすという罪名で告発され、裁判で死刑を宣告され、毒杯を仰いで死んだ。

3.7 ソクラテスの人格と人生



ソクラテス
ルーブル美術館

ソクラテスの家族



父 ソプロニスコス 大工
母 パイナレテ 助産師
妻 クサンティッペ 平凡な女性
幼い子ども 3人

3.7.1 アウトサイダー



河上氏の定義では、**アウトサイダー**とは、**常識社会の枠外にある人間**、**異端**、**幻 (ヴィジョン) を見る人**～中原中也、萩原朔太郎、三好達治、梶井基次郎、堀辰雄、岩野泡鳴、河上肇、岡倉天心、大杉栄、内村鑑三……。

この意味においてソクラテスはアウトサイダーであったと、私は思う。

《参照》ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシャ哲学者列伝』(2.40)
プラトン『ソクラテスの弁明』

3.7.2 非常識な人間 『ソクラテスの弁明』によると

- ① 法廷におけるソクラテスは、法廷弁論にふさわしくない、日常の話し方をした (17C-18A).
- ② 「この仕事が忙しいために、公私いずれのことも、これぞと言うほどのことを行う暇がなくて、ひどい貧乏をしているのです」「これも神に仕えるため」 (23B-C).



アゴラ

- ③ オリュンピア競技会の勝者並に「国立の迎賓館において給食を受ける」ことを要求した (36C-E)

3.7.3 アウトロー



① メレトスによる「後の告発」と多数者による「前の告発」

② 反啓蒙主義とソクラテスの悪玉化

アナクサゴラスとペリクレス

Augustin-Louis Belle (1757-1841)

アナクサゴラスは434-433 BC アテナイから退出

3.7.4 無知の暴露



① ソクラテスは、政治家や作家(詩人)や専門技能者と問答し、彼らの無知を暴露する結果となった (21C-D).

ペリクレスを教えるソクラテス *Nicolas Guibal (1780)*



② 無知迷妄の眠りをむさぼっている
「ポリスを刺すアブ」 (30E-31A).
「吟味のない生活は生きる価値がない」
(37E-38A)

3.7.5 黒幕の存在



クセノポン



アニュトス

- ① クセノポン『ソクラテスの思い出』(1.2.9以下)による, 告発者が述べたソクラテスの罪状.
「ソクラテスは国家の認める神々を信奉せず、かつまた新しい神格を輸入して罪科を犯している。また青年を腐敗せしめて罪科を犯している」
- ② 「ソクラテスと交友関係にあったクリティアスとアルキビアデスは, 国家に最大の害悪を及ぼした者である」→民主派のアニュトスの存在.

3.7.6 プシュケー (たましい) のよさ

- ① 「わたしとは何か」 プシュケー psychē
- ② 「わたしの息のつづくかぎり， わたしにそれができるかぎり，
決して知を愛し求めること (哲学) を止めない」 (29D).
- ③ アレテー (aretē) : 卓越性.
- ④ 田中 美知太郎『ソクラテス』(岩波新書)
たましいが「できるだけすぐれたものになるように気をつけよ」
- ⑤ アレテーを反古にしてまで命乞いをしない.
- ⑥ 知恵を愛し求める生活 (愛知. philosophia)

3.7.7 正しく生きること

- ① 「わたしが死を恐れて、正義に反した譲歩を行うというようなことは、いかなる人に対してもなしえないだろう」(32A)
- ② 「善い市民」．三度にわたる出征．
- ③ 10人の軍事委員一括裁判事件
- ④ 三十人政権の命令事件
- ⑤ 市民としての正しい行動
- ⑥ この正義への姿勢は死刑を控えた獄中でも変わらない．「どのような場合にもけっして故意に不正を行ってはならない」，たとえば「不正をされた場合でも，不正をし返してはならない」

3.7.8 「知る」ということ

- ① 「知」(エピステーメー epistēmē) と「意見」(ドクサ doxa) の峻別
- ② 「無知の知」とエピステーメーへの確固たる姿勢
- ③ ソクラテスが人間の中で一番知恵があるということの意味
は何か？ 政治家の吟味
- ④ 作家(詩人)の吟味
- ⑤ 「手に技能を持つ人たち」の吟味

3.7.9 ソクラテスと神



ソクラテスとダイモニオン

Eugène Delacroix 1838年

Library, Palais Bourbon, Paris

① 神はなくてはならぬ存在

② ダイモニオン

「ダイモン神」的なもの



タンバリンと鏡をもつ女性
とダイモン神

3.7.10 新渡戸とデモン

- ◎ 「ソクラテスのデモン」は「内部の矩(のり)」
～『論集』208-209頁. = 『全集』535-526頁.
- ◎ 「ソクラテスの『鬼神 (デモン)に対する忠誠」
～『全集』1「武士道」[忠義] 80頁.
- ◎ 「哲学者の始祖〔ソクラテス〕の死は半ば自殺であった」
～『全集』1「武士道」[自殺及び復仇の制度] 94-95頁.
→ 「武士が罪を償い, 過ちを謝し, 恥を免れ, 友を贖い, 若しくは自己の誠実を証明する方法」としての「切腹」(ハラキリ).

3.7.11 ソクラテス死後観

- ① 死を恐れることは無知の極み
- ② 死ぬことについて明るい希望をもつべき
- ③ 『クリトン』によると、輝く衣を着た美しい女性：
「三日目にして、あなたは豊かなプティエの地に着くであろう」(44B)
- ④ 『パイドン』によると、「わたしはまさに、すぐれてよき主である神々のもとに至る」(63C). 「これから自分のおもむくかしこには、この世を統治する神々とは別の、賢くもまたよき神々がおられる」(63B)

3.7.12 ソクラテスの死にざま



ソクラテスの死 ジャック=ルイ・ダヴィド 1787年作

パイドン：「あの方はまったく上機嫌なご様子で，それを受け取られたのです．少しも震えずに，顔色や顔つきもまったく損なわずに．(中略) 神への祈りをささげると同時に，あの方は盃を口にもってゆき，いとも無造作にまた平然とそれを飲み干されたのです」(117C)

3.7.13 アスクレピオス神に雄鶏一羽の借り

- ① ソクラテスの最後の言葉: 「クリトン, アスクレピオスに雄鶏一羽の借りがある. 忘れずに, きっと返してくれるように」
(『パイドン』 118)



- ② 岩田 靖夫氏の解釈.
プラトン 『パイドン』
(岩波文庫) 岩田 靖夫 訳.

- ③ ソクラテスの臨終

治癒神アスクレピオス

4 結びに代えて：ユマニズムの系譜

ソクラテス ⇒ プラトン ⇒ 新渡戸稲造



Scuola di Atene (1509-1510) Raffaello Santi

4.1 ユマニスム F: humanisme E: humanism G: Humanismus J: 人文主義

ギリシャ・ローマの古典研究によって深い教養を身につけるとともに、教会の権威や神中心の中世的世界観のような非人間的な重圧から人間を解放し、人間性の再興をめざした精神運動。また、その立場。ルネサンス期にイタリアの商業都市の繁栄を背景にして興り、やがて全ヨーロッパに波及した。代表者は、イタリアのペトラルカとボッカチオ、オランダのエラスムス、フランスのビュデ・ラブレー、ドイツのフッテン、英国のトマス＝モアら。

ソクラテス ⇒ プラトン → エラスムス →

新渡戸稲造． 牧口常三郎． 廣池千九郎． 渡辺一夫．

4.2 《人間》を捜し求めるシノペのディオゲネス 前404年頃～前323年



“Diogenes searching for an Honest Man”
Jacob Jordaens (c. 1642)

4.3 ユマニストとしての渡辺一夫

「歴史の流れの汚水処理役」としてのユマニズム

渡辺一夫氏は、ユマニズムを「歴史の流れの汚水処理役」と表現する。ユマニズムは歴史の流れに見られる「痴愚」や「狂気」を指摘して、悲惨な事態を少しでも減らし、同じ過ちをくり返さないように願う。ユマニズムは、歴史の流れを下る人間の「しりぬぐい」役を勤める、といってもよいくらいであるという。それは「激動のかげの小さなつぶやき」でもある。一方のドグマと他方のドグマの醜い争いを前にして、どちらの陣営にも組することなく、公平な立場から「それはキリストとなんの関係があるのか」と、いかにも小声で問いかける人、それがユマニストである。ユマニストはいつでも根本に立ち返るべき

ことを訴える (渡辺 一夫『ヒューマニズム考 人間であること (講談社 現代新書)』(講談社, 1973年) 52-55頁。

4.4 ユマニストとして的大江健三郎

「私は渡辺一夫のユマニズムの弟子として、小説家である自分の仕事が、言葉によって表現する者と、その受容者とを、個人の、また時代の痛苦からともに恢復させ、それぞれの魂の傷を癒すものとなることをねがっています。」—— 1994年ノーベル文学賞受賞記念講演
ほか、全九篇の講演に語られた、深く暖かい思索の原点と現在。

4.5 ソクラテスが後世に及ぼした影響

ソクラテス→プラトン→プラトニズムの流れ

- ・ アリストテレス(前384-前322)→トマス・アキナス(1225(4)-1274)を代表とするスコラ哲学
- ・ プロティノス(205頃-270頃)ら新プラトン主義
- ・ オリゲネス(185頃-254頃)やニュッサのグレゴリオス(335頃～394以降)ら初期ギリシャ教父
- ・ イタリア・ルネサンスとその古典古代の再発見にともない、フィチーノ(1433-1499)らプラトニスト
- ・ 近世・近代の西洋哲学. ヒューム(1711-1776), カント(1724-1804), ヘーゲル(1770-1831), ベルクソン(1859-1941), ホワイトヘッド(1861-1947), ハイデッガー(1889-1976)

英国の殷富は羊毛より成り、和蘭の豊裕は船舶に基す、邦国各富国の策を異にすと雖、凡そ商工の力によりて国家経済を立てたるは中世以来の事実にして、往時は唯農を以て国本安民の大道なりと思惟せり。故に商工未開時代の学者は、農を称頌するに吝ならざりしが如し。

希臘の聖人ソクラテスは自ら工家に生れ、農を貴重せざる雅典の都にありしかど、猶ほ田夫の業を賞して止まず。今其要点を挙げれば（一）農民は食料を与へ、（二）神前に捧ぐる花、或は犠牲に供する動物を飼ふ、（三）農は人をして勤勉ならしめ、冬の寒さ夏の暑さにも相応の業を執らしむ、（四）農は国家の干城たる騎兵に馬匹を与へ、歩兵に膂力を供す、（五）農家の牧する馬は主人をして早起せしめ、又犬は猛獣を避けしむ、（六）農家所有地は敵兵攻撃の衝にあるを以て、愛国心を高む、（七）農は能く客を歓待するの念を強からしむ、（八）樹木を伐りて薪となし、三冬猶ほ煖を与ふ、（九）炎熱の日は叢林に入りて涼を納るべし、（十）土地は耕耨の勞に応じて、酬ゆるに收穫の多寡を以てす、故に正直の念を起さしむ、（十一）耕耘は扶助補翼の利を知らしめ、其念慮を熾ならしむと。是れ実に哲学の鼻祖ソクラテスが農の徳を頌するの辞、嘆賞亦極れりと謂ふべし。

新渡戸とソクラテスの農業賛美 ～『全集』2「農業本論」（第7章

古賢農を讃するの辞） 319-320

頁. 出典：クセノポン『家政論
(Oikonomikos)』15章-21章.

クセノポンが、ソクラテスに付託
して、自分自身の農業論を述べて
いる.

クセノポン Ξενοφών

前427?-前355?

『ソクラテスの思い出』

『ソクラテスの弁明』

『饗宴』 『家政論』

古賢農を讃するの辞

英国の殷富は羊毛より成り、和蘭の豊裕は船舶に基す、邦国各富国の策を異にすと難、凡そ商工の力によりて国家経済を立てたるは中世以来の事実にして、往時は唯農を以て国本安民の大道なりと思惟せり。故に商工未開時代の学者は、農を称頌するに吝ならざりしが如し。

希臘の聖人ソクラテスは自ら工家に生れ、農を貴重せざる雅典^{アテナイ}の都にありしかど、猶ほ田夫の業を賞して止まず。今其要点を挙げれば（一）農民は食料を与へ、（二）神前に捧ぐる花、或は犠牲に供する動物を飼ふ、（三）農は人をして勤勉ならしめ、冬の寒さ夏の暑さにも相應の業を執らしむ、（四）農は国家の干城たる騎兵に馬匹を与へ、歩兵に膂力を供す、（五）農家の牧する馬は主人をして早起せしめ、又犬は猛獸を避けしむ、（六）農家所有地は敵兵攻撃の衝にあるを以て、愛国心を高む、（七）農は能く客を歓待するの念を強からしむ、（八）樹木を伐りて薪となし、三冬猶ほ煖を与ふ、（九）炎熱の日は叢林に入りて涼を納るべし、（十）土地は耕耨の勞に応じて、酬ゆるに収穫の多寡を以てす、故に正直の念を起さしむ、（十一）耕耘は扶助補翼の利を知らしめ、其念慮を熾ならしむと。是れ実に哲学の鼻祖ソクラテスが農の徳を頌するの辞、嘆賞亦極れりと謂ふべし。

三上 章のプロフィール

1972年 弘前大学人文学部文学科 (哲学専攻) 卒業

1982年 オーストラリア神学学位授与機構 (Australian College of Theology) 大学院神学修士研究コース修了

1997年 東京大学大学院博士課程 (西洋古典学専攻) 単位取得満期退学

2016年 筑波大学博士 (文学)

2003年 北星学園大学チャプレン

2008年 東洋英和女学院大学国際社会学部教授

2017年3月 定年退職。現在 聖書・古典講読会主宰。

専門：西洋古典学・ギリシア哲学、キリスト教学。

主な著作：『プラトン『国家』におけるムウシケー』（リトン、2016年）。『ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性』（リトン、2017年）。

1 私はソクラテスに出会った

ソクラテス：ピロソポス(φιλόσοφος, 愛智者)

Gk. 原典講読：*Apologia, Crito, Laces, Phaedo, Menon, Respublica*

プラトン『パイドン』の最終場面より



La Mort de Socrate (1787) Jacques Louis David

2 新渡戸はソクラテスに出会った

◎ 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』「ソクラテス」(岩波文庫, 2007年) 137-144頁.

一 ソクラテスに依りて懷疑を解く

私は十五、六歳の学生時代から、世の中のことに就て思い悩んでいた。たとえば、自分では正しいと思っしてすることも、相手の気に障って、予想外の怒りや恨みを受けることもあるために、これからは、一体如何なる心掛けで人生を送ったら好いものかということに考え及ぶと、疑惑が百出して、何時も何時もその解決に苦しんだ。然るに、その後、ふとソクラテスの伝記を読むに至って、私の満腔の崇拜心と愛好心は悉くこの偉人の上に濺(そそ)がれるようになり、同時に、永年の懷疑も、頓(とみ)に氷解するを得たのである。

2.1 即ち友人間の交際にしても、あるいは一歩進んで、人生に処する上にも、手を下し、口を開く前には、一、二歩退りぞいて、我儘の利己のためではないか、という事を慎重に反省してみる。しかして、いささかでもそういう気味を帯びておるとすれば、断然これを中止するのであるが、一旦、自分が是ぜなり善なりと信ずるに於ては、それを実行するに寸刻の猶予もしない——こういうことを思って、頓(やが)てはこれを主義ともするようになった。

私が理想的実行家としてリンコーンを愛好すると同じ程度に於て、ここに理想的思想家の真意義をソクラテスの人格に見出して、すべての他の偉人にも増して、これが尊崇の念を禁じ得ないのである。

2.2 二 真に言行一致の人

ソクラテスの伝記書類は随分数多く読んだけれども、私の伝記研究は、学者のする学問のためではなく、常に応用的、いわば自分一個の**精神修養**を目的としたものであるから、勿論、システムなどは立っておらぬ。従って、ソクラテスを読んでも、着眼するところはその一点で、ソクラテスの哲学や何かに就ては、始めからあまり調べる気もしない。

ソクラテスを読んで、一番に面白く思うところは、**かのダイモン**
というものを常に信じて、絶えず、自分の心の中うちに、善悪邪正を区別する、**我にあらざる一種の力**を蔵している。訳してこれを**鬼神**とも称すべきか。とにかく、この一種の力が、たとえ自分の欲することでも、これを行為に顕わさんとする場合には、予めこの**鬼神**に伺いを立てて、允許(いんきょ)を受けることにしていた。

2.3 そして、もしその允許が出ない時には、結局実行を見合わすということになっていた。——これが私の注意を深く惹付つけた点で、また私もかくあろうとして、平生から夙(つと)に戒心しているところである。

私も随分無遠慮な口を利く方で、それが故には、如何なる時に、如何なる誤解を発生せしめ、如何なる迷惑を受けなければならないかも知れぬ。しかしながら、腹に確乎たる覚悟と信念とさえあるならば、さほどびくつくにも及ばない。ただし、考えてみれば、私などの主張するところは、存外穏やかなものである。一つの主義に固持して終世世に容いれられなかった人もあり、あるいはソクラテスの如く刑罰に処せられたり、あるいは、大塩平八郎の如く、世に反抗して反叛(はんぎゃく)を起したりするのに比べては、私は気の弱い所以(ゆえん)でもあろうか、甚だしく穏やかである。

2.4 思った事を実行するといっても、故意に社会の原則を無視したり、折角生立(おいた)って来た習慣を、無闇と破壊するというほどの意気込はない。また一面には、自分の所信にしてもし俗情に全然かなわない時に於ては、私は出来るだけ譲って、主張を枉(ま)げることとする。そして、最後に、これ以上は譲られないというところまでは、自分の力を保留しておく考えである。

それはとにかく、ソクラテスの偉大なところは、徹頭徹尾、思い切って所信を披瀝した、その無遠慮な点に存する事を否み難がたい。もしソクラテスにして、何彼(なにか)にかと斟酌ばかりして、思う事も遠慮していわなかったとするならば、世界はまあどれほどの大損失であったことだろう。プラトンの花も咲き損い、アリストートルの実もまた結び損そこなったに違いない。ソクラテス位の大人物になると、言と行との区別が全くなくなる。

2.5 昔からいう**言行一致をする言葉**が丁度それである。世には、能く「口の人だ」「口ばかりの人だ」といって、言行不一致の輩を嘲けることがあるが、しかし、その「口ばかりの人」にして、もし言うところのものが、すべて赤誠と確信から迸(ほと)ばしり出いずるものであって、**その一語が、直ちにその人の名誉地位に連関し、一命を賭(と)して吐露する、というほどの概があるならば、その言は慥(たし)かに「行」である。否、寧ろ「行」よりも意味が強いと思う。**何故ならば、行は具体的にして、しかも場所と時とを制限するが、言に至っては、抽象的でその達し及ぶ所広く、時もまた無限であるではないか。ソクラテスがアテンの市長になって、其所(そこ)の衛生工事を改良したとか、事務を整理したとか、あるいは軍人になって、ペルシャ人に勝ったことがあったとしても、それは恐らく、彼が口その物で称えたことより以上の仕事とはならなかったことであろう。

2.6 三 崇拜する理由数箇条

私がソクラテスを好み、かつ崇敬する理由を数箇条にして述べてみるならば、**先ず第一には、何事をなすにも、始め己を省み、本心に伺いをたててからする**ということで、これは、今日世間で頻(しき)りに唱道しつつある、**修養なるものの根本となるもの**である。

第二は、無闇に人を区別せず、また責めない点である。たとえば、議論をするにしてもその相手を選ばず、またその題目をも別に選ばない。そして、目的は、相手を負かそうとか、自分の主張をあくまでも徹そうとか、そういう浅薄な野心は毫末(ごうまつ)もない。ただ自分を忘れて、道のために議するという風の態度がありあり見える。だから、およそ志のあるものは誰でも相手にして、少しも意としないのである。

2.7 第三には、高慢な人でなかったということを数えたい。当時、ソクラテスは具眼者から先生といわれるほどの尊敬を受けていながら、微塵も高ぶる風がなかった。また当時、アテンの政治は民主主義であったが、しかし、その制度の下にも、不思議なことは、高慢な人が沢山いた。そして、ソクラテスばかりはその例に洩れていた。してみると、ソクラテスの人物の高慢臭くなかったのは、時代の然らしめたところというようなことが言えなくなる。私は、この徳をソクラテスの性得(しょうとく)に帰するよりも、寧ろ**修養の結果**と看做すことの妥当なるを信ずるものである。

第四には、年が行っても、油断せずに、修養を持続した点である。とかく、吾人(われわれ)は、いくらか名前を知られ、人の尊敬を羸(か)ち得るようになると、忽(たちまち)もう偉くなったような気がして、心が弛み、折角青年時代に守り本尊として

2.8 いた理想を、敝履 (へいり)の如く棄て去るのが多いものであるが、独りソクラテスに限っては、こういう不始末が毫末もなかった。孟子のいわゆる大人にして赤子の心を失わない態度が、実に歴然としてその生活中に見えるのである。

第五には、輿論というか、俗論というか、いわゆる世評なるものに頓着しなかったことである。ソクラテスの容貌は、性来とはいいながら、頗る滑稽なもので、常に物笑いの種となっていた。特に、衆人稠座 (ちょうざ)の中に出ると、直ちに面の批評をされる。けれども、ソクラテスは、その冷評や罵詈の声を聞いても、少しも怒らない。のみならず、自分もまた一緒になって、声を立てて笑っていた。また、ソクラテスはこういう風の外觀的のことばかりではなく、時代の文学者仲間などには、その主義なり思想なりが、往々にして非難の的となり、甚しきは、この人

2.9 を芝居の芸題などにして公々然と冷嘲を浴せかけたこともある。 ※ アリストパネス『雲 (Nubēs)』

けれども、ソクラテスは終始自若としていて、こせこせした弁護をせず、やはり自分も一緒にその芝居見物をして、衆人と共に笑い興じていたほどである。かかる美点を一々列挙するならば、それこそ僕を換(かえ)うるものなお足らぬであろう。勿論、ソクラテスだとて、全智全能の神ではないから、欠点を探れば相応に求め得たであろう。けれども、私はこのソクラテスが全然好きなのだから、その美点ばかりを挙げて差支(さしつか)えないことと思う。グロードなどという人は、ソクラテスの短所を覓(もと)めて、悪辣な筆を運ばし、一時読書界の注目を惹いたこともあったが、しかし、これも今日では、殆んど観察点が外れていて、いずれも正しい筆でないことが明かになった次第である。

2.10 四 公明正大の死

私は、ソクラテスの最も偉大なる点を以て、彼の悲劇なる死際公明正大なのに持って行きたいと思う。ソクラテスの死は、真に死を見ること帰するが如しであった。彼が罪なくて牢獄の人となった時には勿論人を恨らまなかった、弟子などが集まって来て、頻りに弁護せよ弁護せよと勧告するけれど断乎として肯(う)けがわなない。弟子どもは声を励まして、「先生が何の罪もなくして死なれるのが残念です」というと、ソクラテスは嫣然(えんぜん)笑って、「さらば罪あって死ぬのは残念でないのか。死ぬる死なぬは畢竟第二義のことだ。心の鍛錬が第一義だ。」といて聞かした。そして誰も恨まず、天も地も怨みず、泰然自若として振りかかる運命を迎えたのである。

私は、平生自分に関した不愉快な世評を聞いたり、悪口など

2.11 を耳にすると、この場合、ソクラテスであつたら、どう
いう風に始末したろう、と考える気になる。また、思う事
がならず、失望落胆に沈んでいる時にも、もしこれがソクラテ
ス翁さんであつたら、この一刹那を如何に処するであらう、と
振返って、静かに焦立(いらだ)つ精神を鎮めてみると、ある雄々
しい本然の心が腹の底から声を出すのである。同時に、不愉快
な気分も、衰えた神経も、忽(たちまち)にして去ってしまう。

勿論、私はソクラテスの真似をするという訳ではないが、書
斎には常にこのソクラテスと、リンコルンのバストを飾ってお
く。これなども、立派に修養の功を積んだ人々には、かかる必
要は全くないであらうが、私の如き未練なものには、これが一
番に強い刺戟になるのである。

(1911年1月1日『中学世界』14巻1号)

2.12 ◎ 『論集』 「ソクラテス」 「死」の問題に対して (岩波文庫, 2007年) 145-149頁.

死というような哲学じみた問題は、僕らの口を出すべきものでもないし、また出したところで何らの権威にもなるまい。が、ただ死というものは人間として誰でも免るべからざる事柄であり、かつまた考えまいと思っても必ず我々の心を襲うて来る事柄であるから、哲学者でなくても、何人でも、死については何かの思想は持っているものである。しかし一般にいえば死なる現象をいくらか弄てあそぶという嫌いもなきにしもあらずと思う。殆んど 巫山戯(ふざけ)半分に死を論ずるというものもある。しかしこの死に対する観念態度の奈何(いかん)は即ち凡俗と聖賢とを区別する標準じゃないかと思う。死を怖れるという語弊があるが、また死を軽んずるといえばよく聞えるけれども、

2.13 軽んじ方によっては甚だ愚の極であって、日本人は死することを何とも思わぬというは、褒れば褒るようなものの、生の責任を知らぬものと批難さるるのも無理ならぬことと思う。

死の価値を定むるものは生であると思う。しかして生の価値を定むるものは義務である。死を軽んずるということは義務を軽んずるという事になると僕は思っている。己れの為(な)すべき事を為して天にも地にも愧(は)じない人は、死を見ること帰るが如くなるべきで、これは古来の聖人君子の死方を観てもよく分る。これに反して己れの為すべき事をも為さずして死を恐れぬという。その辺の熊だの八だのと択ぶところがない。こういう風に死を軽んずるという事は決して褒むるに足らぬと思う。

誰でも死を怖れるということは普通であるが、この死を怖れるという観念は、ただ生理学上あるいは生物学上のみの現象で

2.14 あろうとは僕には思われぬ。これには深い倫理的の意味のあるものと思う。死を怖るるとは即ち生を重んずるの意味だろうと思う。生を重んずるというのは生きて為すべき義務を重んずる意味である。譬えていえば少女が男子に近づくことを怖れる、その理由を訊(ただ)せば知らない。この無意識に怖いということは少女の節操を重んずる理由であるんで、人が死を怖れるのもこれと同じもので、無意識に生の義務を重んずるに由るものと思う。

己れの義務を全うした人には、死は怖くも恐ろしくもないものじゃないかと思う。かつまた死というものが、果してそう明かに生から区別すべきものかどうかという事も僕にはちょっと信じられない。無論死ねば肉体が朽ちる。物を言うておったものが言わなくなる。動いたものが静かになる、というような点からいうと非常な変化である。けれどもこれは生の一段階に

2.15 過ぎないのじゃないかという気がする。聖書にもある通り麦の種が死ななければ穂が出ない、ちょうどあんなようなもので、朽ちるところはなるほど麦の種が素人言葉でいう朽ちるように朽ちるであろう。が、それがために新たに種を結ぶところの根だの茎だのが生える。幽明とか、有無とかいうものは形而下の話で、精神上からいうたならば、生と死というものはさほど区別のあるものでないかも知れんと思う。 **メーテルリンク** の『青い鳥』——あれは読んでも面白い戯曲であるが、私はあの実演を亜米利加で見たが、実に今でも忘れられない印象を受けた。 **爺さんと婆さんが小屋の前に腰を掛けて眠っている。そこに孫が二人走って来て「お爺さん、お婆さん」と声をかけると、二人が眼を覚まして孫を抱いて大変に喜ぶ。すると孫は、「お爺さん、お婆さん、あなたたちはよほど前に死んで**

2.16 しまったんじゃないんですか」というと、お爺さんがいうのに、「世の中では私たちを死んだというんだが、いわゆる死んだ人も世の中の人を忘れている間は死んだというんで、記念してくれる人があるとその度ごとに生き返るんだ。」という所がある。それから同じ『青い鳥』の中に――あすこは芝居で見ぬと分らぬ所と思うが――子供ら二人が墓場に行き、妹は「こんな淋しい所に来て怖い怖い」と大きな声して泣く。すると兄貴の方が「何怖い事があるものか」というてちょっと頭に被っている帽子に手を触ると、墓場が急に花園に変わる。詰り世の中に死というものがないということを現わした所で、即ち頭の使いようによって死ぬる生きるという事が定まるんで、多く主観的の現象と見做してよいように思う。

私はこの死という事を思うと、何時(いつ)でもソクラテスと

2.17 基督(キリスト)の死方に心を慰むることが多い。かのルソーもソクラテスの伝を書いて、彼の自若として死ぬる様には非常に敬服したものと見えて、その伝の筆を擱(お)かんとする時に「ソクラテスは実(げ)に哲学者の死を遂げた」と書いてその文を結ばんとした時に、ふと眼前に閃(ひらめ)いたのは基督の死方であった。故にまた筆を執り直し殆んど附録のように「然るにエス・キリストは神の如くに死した」と書き加えた。外から見て、自若として死を迎える胆力は、世に稀とはいいいながら、数えれば少くないと私は思う。ただややもすると、死を以て最上の戯曲ドラマの如く思っているものがある。俺が死ぬんだから、ここで一つ華やかにして見せようというようなものがある。内心、人と和し神と親しみ、心に一点の悔ゆることなく、安らげく死を迎う、これは頗(すこぶ)る少いものだと思う。プルタークの英雄伝などを見ると、ローマ人などには、

2.18 よく日本の英雄豪傑に似た人格が沢山ある。その死に臨んだ時なども、いわゆる武士気質を現わしているが、しかしその中に死を一のドラマ的に感じておりはせぬかと思わるるものが沢山ある。これは私の感心しないところである。ただ、何にもない、当り前の通りにして死ぬる様は、これこそ実に敬服に値するのである。僕は日頃南洲翁を崇拝するものであるが、この点に於ても益々翁の偉大なることが分る。如何にも生きておっても死んでおっても何も変らんという風が見える。あるいは死を見ること生の如く、その代り一方には生を見ること死の如く、形而上幽明有無の区別を知らなかった。実に平々淡々としている。こういう修養が出来た人が、一番エライんじゃないかと私は思う。（1913年11月1日『中央公論』28巻13号）

※ 南洲翁：西郷隆盛 1828-1877

2.19 ◎ 新渡戸稲造『自警録—心のもちかた—』(講談社学術文庫)「第10章 人生の成敗」〔ギリシアのソクラテスを見よ〕140-142頁.

むかしギリシアの哲学者ソクラテスのもとに、ある兇漢が来て、さんざん悪口を言って帰った。かたわらに聞いておった門弟が、哲学者に向かって、「先生あいつ奴(め)、いかにも憎い奴でございます」といったときに、哲学者は泰然として、「なぜにくい」といったら、「あんなに先生を恥ずかしめたのがにくい」といった。彼は笑いながら、「お前は少し考え違いをしている。彼はわが輩を恥ずかしめた考えかも知れないが、俺はちっとも恥ずかしめられたとは思わない。自分が恥でも受けたような顔をしとったかね」と答えたという。失敗もその通り、世の中で何某(なにがし)が大い失敗したと四面楚歌の声が聞こえても、本の当人はどこを風が吹くかという顔をしていることが

2.20 たまさかある。二千四百年前に、ソクラテスがアテネの裁判所に召喚せられ、有罪の宣告を受けて、獄屋に投ぜられたときには、アテネの者が皆々嘲けり笑って、とうとうあのおしゃべり爺いも、あの年になって、本性露見して畳の上でくたばりそこなったわい、と評判を立てて、もし当時アテネに新聞があったものなら、いかに当時の記者が論説やら雑報に忙しく彼の罪状を書き立て、彼がその日まで口に唱えた教訓はまったく偽善であったとか、彼の純潔なる素行はたくみに人を欺くの方法であって、その実、彼がかくのごとき事したのであろう、ああいう事をしたと、ありとあらゆる捏造説を書き立てたであらう。

基督がゴルゴタの山上で、かの非命の最期を遂(と)げたごときも、世人は、あの男もとうとう尻尾を現して、あのさまの

2.21 死に方をしたとか、表向きには君子顔をしておっても、陰ではだいぶ不仕末の事があったそうさ、社会主義も唱えたそうさ、某婦人と仲がよかったそうさ、謀叛の目論見さえしたそうさ、始終下等な女や悪党の仲間につき合っておったそうさ、折々は魔法みたいな事をして愚民を驚かしたそうさ、始終猫撫声(ねこなでごえ)をして女子供を手なずけたそうさなど、その他あらゆる悪口をもって、彼は見事に失敗したなどといったであろう。いずくんぞ知らん敗けたと思った人が最後の勝利者たることを。

負けて退(ひ)く人を弱しと思ふなよ智恵の力の強き故なり

3 私と新渡戸がこよなく敬愛するソクラテスを識る

3.1 参考文献

◎ プラトン著作集

納富 信留 訳『ソクラテスの弁明』(光文社古典新訳文庫, 2012年)

三嶋 輝夫・田中 享英 訳『ソクラテスの弁明・クリトン』
(講談社学術文庫, 2001年)

岩田 靖夫 訳『パイドン』(岩波文庫, 2000年)

◎ クセノフォン『ソークラテースの思い出』 佐々木 理 訳
(岩波文庫, 1977年)

◎ アリストパネース『雲』 橋本 隆夫 訳.

『ギリシャ悲劇全集 1 アリストパネース』(岩波書店, 2008年)

3.2

新渡戸が使用した プラトン著作集の英訳

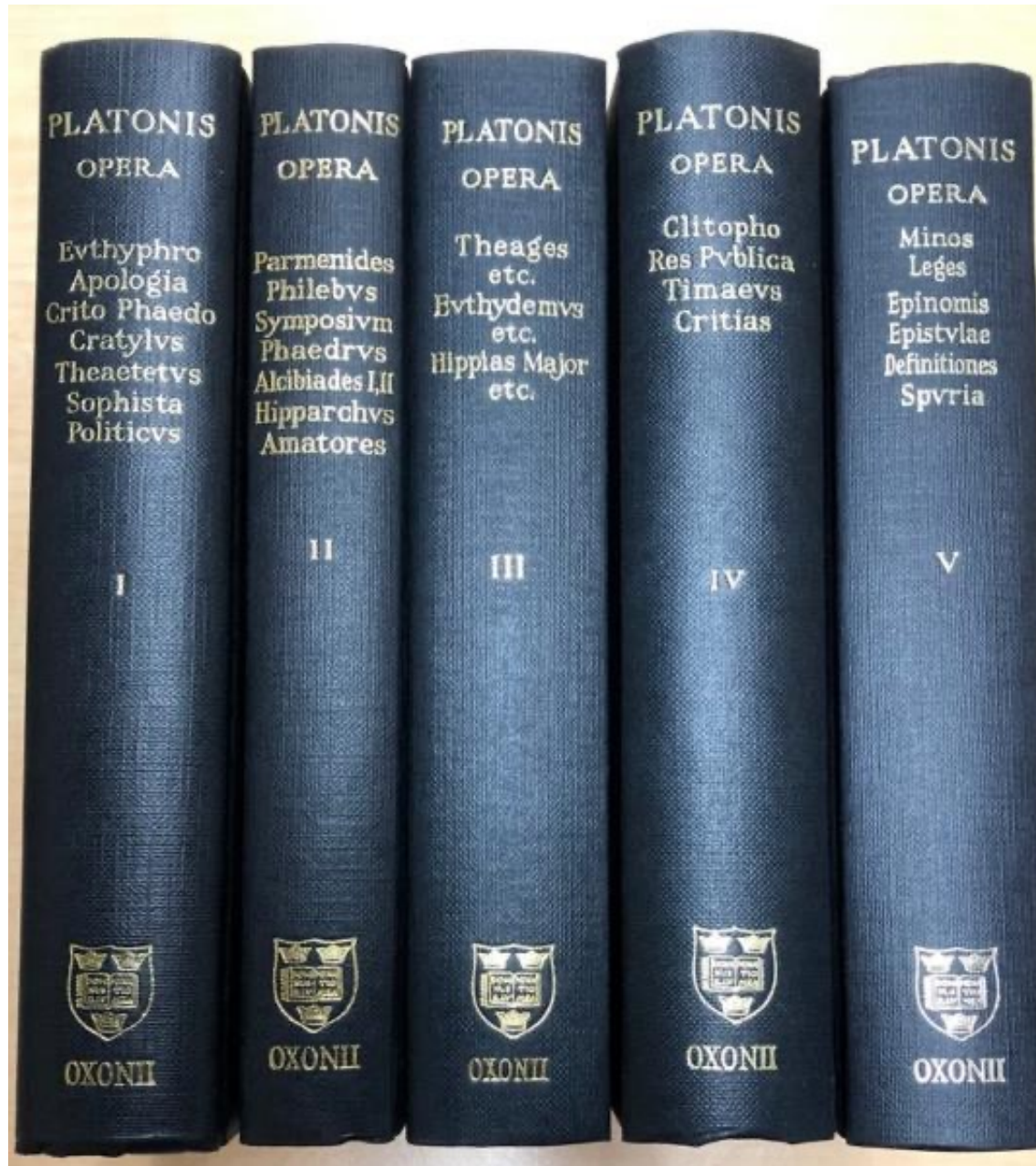


Benjamin Jowett, 1893

The Dialogues of Plato translated into English with Analyses and Introductions by B. Jowett, M.A. in Five Volumes. 3rd edition revised and corrected (Oxford University Press, 1892).

3.3

Oxford Classical Texts: Plato



3.4 プラトン Platōn 前427-前347

〔加藤信朗 2015年〕日本大百科全書(ニッポニカ)

プラトンは渾名。本名は「アリストクレス」 アテネの名門の生まれで、若いころは政治に志したが、ソクラテスの処刑を転機として、暗愚なアテネの政界を見限り、人間の存在を真に根拠づけうるものを求めて、愛知(フィロソフィア、哲学)に向かった。

紀元前385年ごろ、アテネの近郊、英雄アカデモスに捧げられた神域に学園アカデメイアを開き、各地から青年を集めて、研究と教育の生活に専念し、80歳に及んだ。その間二度までもシチリア島に渡り、シラクサの僭主ディオニシオス2世を教育し、理想の政治を実現しようとして挫折したが、その試みは彼の哲学の向かうところを示している。

生前に公刊されたほぼ30編に及ぶ著作は、そのまま今日に保存されているが、ほぼすべて一種の戯曲作品であって、いろいろ論題をめぐり哲学的論議が交わされ、「対話篇」とよばれている。ソクラテスが主要な登場人物である。執筆年代によって、

〔1〕ソクラテスを中心にして、主として徳の何であるかが論ぜられ、たいていアポリア *aporiā* (行き詰まり) に陥って終わる前期対話篇 (『ソクラテスの弁明』『クリトン』『ラケス』『カルミデス』『プロタゴラス』『ゴルギアス』『メノン』など) ,

〔2〕魂の不滅に関する壮麗なミュートス *mýthos* (物語) に飾られ、ソクラテスによってイデア論が語られる、文芸作品としてはもっとも円熟した中期対話篇 (『パイドン』『パイドロス』『饗宴』『国家』など),

〔3〕 哲学の論理的な方法への関心が強く、魂とアイデアの説がソクラテスの姿とともにしだいに姿を消していくかにみえる後期対話篇（『パルメニデス』『テアイテトス』『ソピステス』『ポリティコス（政治家）』『ピレボス』『ティマイオス』『法律』など）に分かれる。

3.5 新渡戸とプラトン

◎ 『全集』20「編集余録」〔258 偉大なるプラトン〕289頁.

「古き薪は燃やすべく，古き酒は飲むべく，古き書は読むべきである．・・・プラトンは，最近の著者と同じくらい新鮮である」

◎ 『全集』20「編集余録」〔420 プラトン近代教育を語る〕

453頁. 「プラトンは永遠に若い．プラトンの唇から流れる言葉は，泉からほとばしる水にも似て，いつになっても新鮮である．プラトンは言う——『けだしわれわれが今話しているのは，こういう狭い意味の教育ではなく，青年時代から始まる徳の教育のことであって，これは，市民としての理想的完成を熱烈に追求させるのであり，また，正しい統治法と服従法を教えるものである』」

3.6 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典「ソクラテス」

◎ ソクラテス Sōkratēs 前470頃-前399

彫刻家ソプロニスコスと助産師パイナレテの子。前半生はほとんど不明。後半生、特に晩年はプラトン、クセノポン、アリストテレス、アリストパネスの著作から知られる。著作を残さなかったもので、その学説は主としてプラトンの対話篇によるほかはなく、それ自体哲学史上の大きな問題となっている。

ソクラテスは「汝自身を知れ」というデルポイの神託をあらゆる哲学的思考の出発点においた。人間の自己とは身体ではなく靈魂であり、この靈魂をよい状態に保つことに人間としての幸福が存するとの立場から、善や他の諸価値をロゴスによって吟味することを試みた。

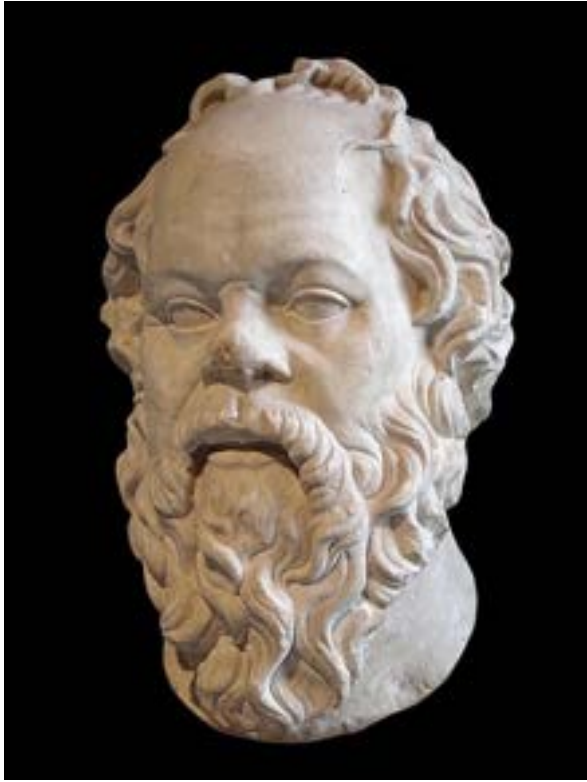
その方法としては対話におけるエイロネイア（ソクラテ斯的皮肉）と助産術（マイエウティケー）が有名である。アリストテレスは学の基礎としての帰納法と概念的定義をソクラテスの二つの功績として認めている。

70歳のときメレトスやアニュトスらに告訴され死刑宣告を受け、毒杯を仰いで死んだ。

◎ デジタル大辞泉「ソクラテス」の解説

「よく生きること」（エウゼーン）を求め、問答法によって相手に自らの無知を自覚させ、真の認識に到達させようとした。しかしこの努力は理解を得られず、国家の信奉する神々を否定し、青年たちに悪い影響を及ぼすという罪名で告発され、裁判で死刑を宣告され、毒杯を仰いで死んだ。

3.7 ソクラテスの人格と人生



ソクラテス
ルーブル美術館

ソクラテスの家族



父 ソプロニスコス 大工

母 パイナレテ 助産師

妻 クサンティッペ 平凡な女性

幼い子ども 3人

3.7.1 アウトサイダー



河上氏の定義では、**アウトサイダー**とは、**常識社会の枠外にある人間**、**異端**、**幻 (ヴィジョン) を見る人**～中原中也、萩原朔太郎、三好達治、梶井基次郎、堀辰雄、岩野泡鳴、河上肇、岡倉天心、大杉栄、内村鑑三……。

この意味においてソクラテスはアウトサイダーであったと、私は思う。

《参照》ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシャ哲学者列伝』(2.40)
プラトン『ソクラテスの弁明』

3.7.2 非常識な人間 『ソクラテスの弁明』によると

- ① 法廷におけるソクラテスは、法廷弁論にふさわしくない、日常の話し方をした (17C-18A).
- ② 「この仕事が忙しいために、公私いずれのことも、これぞと言うほどのことを行う暇がなくて、ひどい貧乏をしているのです」「これも神に仕えるため」 (23B-C).



アゴラ

- ③ オリュンピア競技会の勝者並に「国立の迎賓館において給食を受ける」ことを要求した (36C-E)

3.7.3 アウトロー



① メレトスによる「後の告発」と多数者による「前の告発」

② 反啓蒙主義とソクラテスの悪玉化

アナクサゴラスとペリクレス

Augustin-Louis Belle (1757-1841)

アナクサゴラスは434-433 BC アテナイから退出

3.7.4 無知の暴露



① ソクラテスは、政治家や作家(詩人)や専門技能者と問答し、彼らの無知を暴露する結果となった (21C-D).

ペリクレスを教えるソクラテス *Nicolas Guibal (1780)*



② 無知迷妄の眠りをむさぼっている
「ポリスを刺すアブ」 (30E-31A).
「吟味のない生活は生きる価値がない」
(37E-38A)

3.7.5 黒幕の存在



クセノポン



アニュトス

- ① クセノポン『ソクラテスの思い出』(1.2.9以下)による, 告発者が述べたソクラテスの罪状.
「ソクラテスは国家の認める神々を信奉せず、かつまた新しい神格を輸入して罪科を犯している。また青年を腐敗せしめて罪科を犯している」
- ② 「ソクラテスと交友関係にあったクリティアスとアルキビアデスは, 国家に最大の害悪を及ぼした者である」→民主派のアニュトスの存在.

3.7.6 プシュケー (たましい) のよさ

- ① 「わたしとは何か」 プシュケー psychē
- ② 「わたしの息のつづくかぎり， わたしにそれができるかぎり，
決して知を愛し求めること (哲学) を止めない」 (29D).
- ③ アレテー (aretē) : 卓越性.
- ④ 田中 美知太郎『ソクラテス』(岩波新書)
たましいが「できるだけすぐれたものになるように気をつけよ」
- ⑤ アレテーを反古にしてまで命乞いをしない.
- ⑥ 知恵を愛し求める生活 (愛知. philosophia)

3.7.7 正しく生きること

- ① 「わたしが死を恐れて、正義に反した譲歩を行うというようなことは、いかなる人に対してもなしえないだろう」(32A)
- ② 「善い市民」．三度にわたる出征．
- ③ 10人の軍事委員一括裁判事件
- ④ 三十人政権の命令事件
- ⑤ 市民としての正しい行動
- ⑥ この正義への姿勢は死刑を控えた獄中でも変わらない．「どのような場合にもけっして故意に不正を行ってはならない」，たとえば「不正をされた場合でも，不正をし返してはならない」

3.7.8 「知る」ということ

- ① 「知」(エピステーメー epistēmē) と「意見」(ドクサ doxa) の峻別
- ② 「無知の知」とエピステーメーへの確固たる姿勢
- ③ ソクラテスが人間の中で一番知恵があるということの意味
は何か？ 政治家の吟味
- ④ 作家(詩人)の吟味
- ⑤ 「手に技能を持つ人たち」の吟味

3.7.9 ソクラテスと神



① 神はなくてはならぬ存在

② ダイモニオン

「ダイモーン神」的なもの



ソクラテスとダイモニオン

Eugène Delacroix 1838年

Library, Palais Bourbon, Paris

タンバリオンと鏡をもつ女性
とダイモーン神

3.7.10 新渡戸とデモン

- ◎ 「ソクラテスのデモン」は「内部の矩(のり)」
～『論集』208-209頁. = 『全集』535-526頁.
- ◎ 「ソクラテスの『鬼神 (デモン)に対する忠誠」
～『全集』1「武士道」[忠義] 80頁.
- ◎ 「哲学者の始祖〔ソクラテス〕の死は半ば自殺であった」
～『全集』1「武士道」[自殺及び復仇の制度] 94-95頁.
→ 「武士が罪を償い, 過ちを謝し, 恥を免れ, 友を贖い, 若しくは自己の誠実を証明する方法」としての「切腹」(ハラキリ).

3.7.11 ソクラテス死後観

- ① 死を恐れることは無知の極み
- ② 死ぬことについて明るい希望をもつべき
- ③ 『クリトン』によると、輝く衣を着た美しい女性：
「三日目にして、あなたは豊かなプティエの地に着くであろう」(44B)
- ④ 『パイドン』によると、「わたしはまさに、すぐれてよき主である神々のもとに至る」(63C). 「これから自分のおもむくかしこには、この世を統治する神々とは別の、賢くもまたよき神々がおられる」(63B)

3.7.12 ソクラテスの死にざま



ソクラテスの死 ジャック=ルイ・ダヴィド 1787年作

パイドン：「あの方はまったく上機嫌なご様子で，それを受け取られたのです．少しも震えずに，顔色や顔つきもまったく損なわずに．(中略) 神への祈りをささげると同時に，あの方は盃を口にもってゆき，いとも無造作にまた平然とそれを飲み干されたのです」(117C)

3.7.13 アスクレピオス神に雄鶏一羽の借り

- ① ソクラテスの最後の言葉: 「クリトン, アスクレピオスに雄鶏一羽の借りがある. 忘れずに, きっと返してくれるように」
(『パイドン』 118)



- ② 岩田 靖夫氏の解釈.
プラトン 『パイドン』
(岩波文庫) 岩田 靖夫 訳.

- ③ ソクラテスの臨終

治癒神アスクレピオス

4 結びに代えて：ユマニズムの系譜

ソクラテス ⇒ プラトン ⇒ 新渡戸稲造



Scuola di Atene (1509-1510) Raffaello Santi

4.1 ユマニスム F: humanisme E: humanism G: Humanismus J: 人文主義

ギリシャ・ローマの古典研究によって深い教養を身につけるとともに、教会の権威や神中心の中世的世界観のような非人間的な重圧から人間を解放し、人間性の再興をめざした精神運動。また、その立場。ルネサンス期にイタリアの商業都市の繁栄を背景にして興り、やがて全ヨーロッパに波及した。代表者は、イタリアのペトラルカとボッカチオ、オランダのエラスムス、フランスのビュデ・ラブレー、ドイツのフッテン、英国のトマス＝モアら。

ソクラテス ⇒ プラトン → エラスムス →

新渡戸稲造． 牧口常三郎． 廣池千九郎． 渡辺一夫．

4.2 《人間》を捜し求めるシノペのディオゲネス 前404年頃～前323年



“Diogenes searching for an Honest Man”
Jacob Jordaens (c. 1642)

4.3 ユマニストとしての渡辺一夫

「歴史の流れの汚水処理役」としてのユマニズム

渡辺一夫氏は、ユマニズムを「歴史の流れの汚水処理役」と表現する。ユマニズムは歴史の流れに見られる「痴愚」や「狂気」を指摘して、悲惨な事態を少しでも減らし、同じ過ちをくり返さないように願う。ユマニズムは、歴史の流れを下る人間の「しりぬぐい」役を勤める、といってもよいくらいであるという。それは「激動のかげの小さなつぶやき」でもある。一方のドグマと他方のドグマの醜い争いを前にして、どちらの陣営にも組することなく、公平な立場から「それはキリストとなんの関係があるのか」と、いかにも小声で問いかける人、それがユマニストである。ユマニストはいつでも根本に立ち返るべき

ことを訴える (渡辺 一夫『ヒューマニズム考 人間であること (講談社 現代新書)』(講談社, 1973年) 52-55頁。

4.4 ユマニストとして的大江健三郎

「私は渡辺一夫のユマニズムの弟子として、小説家である自分の仕事が、言葉によって表現する者と、その受容者とを、個人の、また時代の痛苦からともに恢復させ、それぞれの魂の傷を癒すものとなることをねがっています。」—— 1994年ノーベル文学賞受賞記念講演ほか、全九篇の講演に語られた、深く暖かい思索の原点と現在。

4.5 ソクラテスが後世に及ぼした影響

ソクラテス→プラトン→プラトニズムの流れ

- ・ アリストテレス(前384-前322)→トマス・アキナス(1225(4)-1274)を代表とするスコラ哲学
- ・ プロティノス(205頃-270頃)ら新プラトン主義
- ・ オリゲネス(185頃-254頃)やニュッサのグレゴリオス(335頃～394以降)ら初期ギリシャ教父
- ・ イタリア・ルネサンスとその古典古代の再発見にともない、フィチーノ(1433-1499)らプラトニスト
- ・ 近世・近代の西洋哲学. ヒューム(1711-1776), カント(1724-1804), ヘーゲル(1770-1831), ベルクソン(1859-1941), ホワイトヘッド(1861-1947), ハイデッガー(1889-1976)

英国の殷富は羊毛より成り、和蘭の豊裕は船舶に基す、邦国各富国の策を異にすと難、凡そ商工の力によりて国家経済を立てたるは中世以来の事実にして、往時は唯農を以て国本安民の大道なりと思惟せり。故に商工未開時代の学者は、農を称頌するに吝ならざりしが如し。

希臘の聖人ソクラテスは自ら工家に生れ、農を貴重せざる雅典の都にありしかど、猶ほ田夫の業を賞して止まず。今其要点を挙げれば（一）農民は食料を与へ、（二）神前に捧ぐる花、或は犠牲に供する動物を飼ふ、（三）農は人をして勤勉ならしめ、冬の寒さ夏の暑さにも相応の業を執らしむ、（四）農は国家の干城たる騎兵に馬匹を与へ、歩兵に膂力を供す、（五）農家の牧する馬は主人をして早起せしめ、又犬は猛獣を避けしむ、（六）農家所有地は敵兵攻撃の衝にあるを以て、愛国心を高む、（七）農は能く客を歓待するの念を強からしむ、（八）樹木を伐りて薪となし、三冬猶ほ煖を与ふ、（九）炎熱の日は叢林に入りて涼を納るべし、（十）土地は耕耨の労に応じて、酬ゆるに収穫の多寡を以てす、故に正直の念を起さしむ、（十一）耕耘は扶助補翼の利を知らしめ、其念慮を熾ならしむと。是れ実に哲学の鼻祖ソクラテスが農の徳を頌するの辞、嘆賞亦極れりと謂ふべし。

新渡戸とソクラテスの農業賛美

～『全集』2「農業本論」（第7章

古賢農を讃するの辞） 319-320

頁. 出典：クセノポン『家政論

（Oikonomikos）』15章-21章.

クセノポンが、ソクラテスに付託して、自分自身の農業論を述べている。

クセノポン Ξενοφών

前427?-前355?

『ソクラテスの思い出』

『ソクラテスの弁明』

『饗宴』 『家政論』

古賢農を讃するの辞

英国の殷富は羊毛より成り、和蘭の豊裕は船舶に基す、邦国各富国の策を異にすと難、凡そ商工の力によりて国家経済を立てたるは中世以来の事実にして、往時は唯農を以て国本安民の大道なりと思惟せり。故に商工未開時代の学者は、農を称頌するに吝ならざりしが如し。

希臘の聖人ソクラテスは自ら工家に生れ、農を貴重せざる雅典^{アテナイ}の都にありしかど、猶ほ田夫の業を賞して止まず。今其要点を挙げれば（一）農民は食料を与へ、（二）神前に捧ぐる花、或は犠牲に供する動物を飼ふ、（三）農は人をして勤勉ならしめ、冬の寒さ夏の暑さにも相應の業を執らしむ、（四）農は国家の干城たる騎兵に馬匹を与へ、歩兵に膂力を供す、（五）農家の牧する馬は主人をして早起せしめ、又犬は猛獸を避けしむ、（六）農家所有地は敵兵攻撃の衝にあるを以て、愛国心を高む、（七）農は能く客を歓待するの念を強からしむ、（八）樹木を伐りて薪となし、三冬猶ほ煖を与ふ、（九）炎熱の日は叢林に入りて涼を納るべし、（十）土地は耕耨の勞に応じて、酬ゆるに収穫の多寡を以てす、故に正直の念を起さしむ、（十一）耕耘は扶助補翼の利を知らしめ、其念慮を熾ならしむと。是れ実に哲学の鼻祖ソクラテスが農の徳を頌するの辞、嘆賞亦極れりと謂ふべし。

三上 章のプロフィール

1972年 弘前大学人文学部文学科 (哲学専攻) 卒業

1982年 オーストラリア神学学位授与機構 (Australian College of Theology) 大学院神学修士研究コース修了

1997年 東京大学大学院博士課程 (西洋古典学専攻) 単位取得満期退学

2016年 筑波大学博士 (文学)

2003年 北星学園大学チャプレン

2008年 東洋英和女学院大学国際社会学部教授

2017年3月 定年退職。現在 聖書・古典講読会主宰。

専門：西洋古典学・ギリシア哲学、キリスト教学。

主な著作：『プラトン『国家』におけるムウシケー』（リトン、2016年）。『ケンブリッジ・プラトニストの哲学的靈性』（リトン、2017年）。